

文化財めぐり

深堀散策

発行日 平成16年12月5日
発行所 長崎市魚の町5-1
長崎市教育委員会
生涯学習部文化財課
TEL 829-1193



深堀武家屋敷通り

- 日時 平成16年12月5日(日) 10:00～12:00
- コース 深堀神社～深堀武家屋敷跡～深堀陣屋跡～深堀陣屋跡のアコウ～
馬場崎経塚～五官の墓～菩提寺～深堀貝塚遺跡資料館
- 主催 長崎市教育委員会
- 講師 長崎市教育委員会文化財課嘱託職員(学芸員) 櫻庭 由美

深堀

深堀では縄文時代以降から現在に至るまで綿々と人々の生活が営まれてきました。平安時代後期以降、彼杵庄戸町浦(戸八浦)に属し、戸町氏の支配下にありました。

承久3年(1221)に起こった承久の乱により、鎌倉幕府方として戦い勲功を揚げた深堀仲光は、摂津国(大阪府)を貰い受けました。しかし、その子能仲は、恩賞地の変更を二度にわたり幕府に申し入れ、建長7年(1255)肥前国彼杵庄戸町浦の地頭職に任ぜられました。

深堀氏は、本姓は三浦氏で、上総国伊南庄深堀(現・千葉県夷隅郡大原町)を本貫地とする鎌倉幕府の御家人でしたが、仲光の頃、深堀に居を移し、姓を深堀と改め、さらに新しく地頭となった戸町浦の地に「深堀」の地名をつけたとされています。

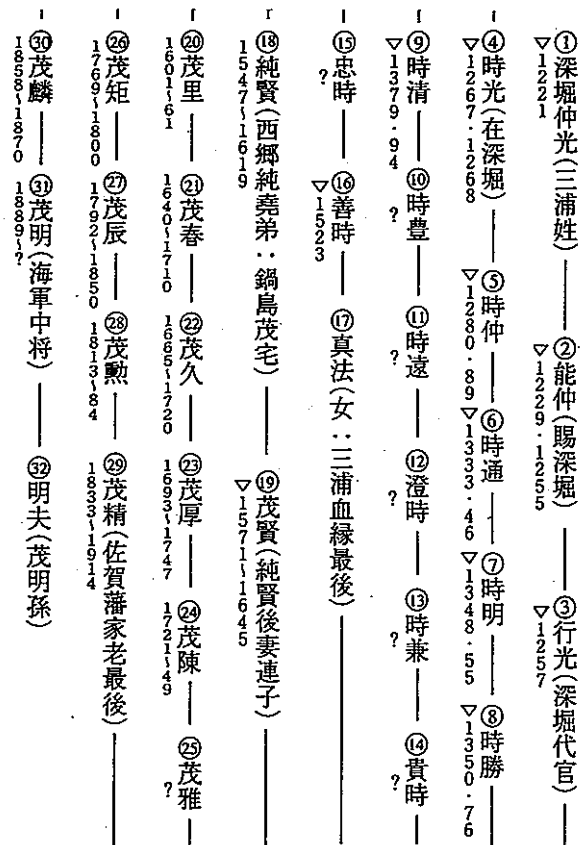
その後、深堀氏は南北朝以降も勢力を伸ばし、野母半島一帯に影響力を及ぼすようになりました。深堀氏は、初めは有馬氏の支配下に入っていたましたが、有馬氏から離れるとともに、代わって西郷純堯の弟純賢を養子とし、以後西郷氏の支配下に入っていました。

その後、天正15年(1588)豊臣秀吉の九州征伐に従軍したため、本領を安堵されましたが、翌年、長崎に入港する商船より通行税を徴収したため、領地を没収されました。後に赦され、本領は返還されましたが、野母、高浜、川原の3カ村は返還されませんでした。

純賢は、文禄元年(1592)には佐賀藩の鍋島直茂に従い朝鮮に出陣し、その後、家老職となりました。純賢は鍋島姓を賜り、名も茂宅と改名し、佐賀藩の重臣故石井安芸守の子茂賢を養子にしました。以後、子孫は代々家老職を勤め、6千石を領しました。

明治4年の廃藩置県で、深堀は、佐賀県、さらには、伊万里県に属し、同5年には、長崎県に属しました。この時の深堀村は、土井の首、竿の浦、平山、大籠、蚊焼、香焼、高島、伊王島、沖ノ島を合併し、深堀本村の一村としました。明治11年西彼杵郡となり、同13年、各村は分離しました。

[深堀領主系図]



※凡例：▽時蹟のわかる年号 ? 生没年不詳
～生年～没年

深堀神社の鳥居<旧幸天宮石神門>(市指定有形文化財)

深堀神社は、建長7年(1255)能仲がこの地に下ってきた時には、すでに祀られていたと伝えられています。祭神は猿田彦命、天鈿女命で、幸天社と呼ばれていました。神社は江戸時代には、現在の深堀小学校の校庭のところにありましたが、小学校の建設により現在の地に移されました。

深堀神社の鳥居は、その柱に深堀創設の由来が刻してあります。この鳥居は2代目です。平成10年4月に市指定有形文化財に指定されました。

深堀武家屋敷・深堀陣屋跡

深堀氏は江戸時代以降深堀陣屋跡に居を構え、陣屋を中心に城下町が形成されていました。城下町入り口には、東屋敷(三番家老樋口家)、中屋敷(筆頭家老深堀家)、西屋敷(二番家老田代家)などがありました。さらに、中・下級武士の屋敷が続き、その一番奥に陣屋がありました。陣屋は御屋敷と呼ばれ、御座や書院などの屋敷と馬場がありました。現在、武家屋敷の練塀にその名残がみられます。

深堀陣屋跡のアコウ(市指定天然記念物)

アコウは、クワ科の常緑高木です。このアコウは、胸高幹囲6.90m、樹高およそ20m、東西・南北へそれぞれ25mの枝張りがあり、地上4mまで直立して、そこから出る支幹も高く上に伸び、美しい樹形をつくっています。横に伸びる支幹がないためか、支柱根は全く見られず、数本の気根を垂らすだけというのも珍しく、このアコウの特徴ともいえます。昭和51年7月に市指定天然記念物に指定されました。

馬場崎経塚

馬場崎経塚は、江戸時代に造られた一字一石経塚です。平成9年川内自治会の公民館建設に伴い、馬場崎経塚の発掘調査を実施した結果、2基の経石埋納遺構と約20万6千点におよぶ経石が出土しました。そのうち1号経塚は、寛文2年(1662年)の造営で、鍋島志摩守茂春の出資によって行われた菩提寺の大規模な堂宇建設に伴うものでした。2号経塚は、経碑に延享2年(1745)造営の刻銘があります。いずれも土坑に直接経石が埋納しており、内部には地元の石を使用して法華経を書写したと考えられる経石が隙間なく納められていました。



馬場崎経塚

五官の墓(市指定史跡)

林氏五官呉公の墓です。五官は法名を続室浄連居士といい、慶長11年(1606)から元和2年(1616)にかけて、カンボジアやベトナムに渡航した、朱印船貿易家唐人五官と推定されています。寛永14年(1637)6月19日に死去しています。

墳墓は奥行4.4m、間口3.23mで、前方部は石畳、後円部は一段高くなり、中国の華南系の墓地

の様式を良く残しています。石碑表面には墓碑銘がありましたが、現在は風化が進んで判然としていません。昭和49年3月に市指定史跡に指定されました。

金谷山菩提寺

創建の時期は不詳です。縁起では深堀能仲が開基したとされます。創建当時は真言宗でしたが、のち天台宗、再び真言宗となり、現在は曹洞宗となっています。山号の金谷山は、相模国三浦庄金谷(横須賀市金谷町)に因み、開山は能登総持寺の僧であった朝山芳叡ですが、朝山が周防国岩国の大寧寺の末寺としました。中興開山は3代一翁芳純で、長崎奉行長谷川左兵衛の援助を得て諸堂を建立しました。廃藩置県後、寺を廃して学校とすることになり、一時龍珠庵に移りましたが、廃寺になることは中止され、菩提寺が存続し現在に至っています。

深堀義士碑

昭和17年(1942)に、菩提寺境内に「深堀義士」として21基の墓碑が建立されました。元禄13年(1700)12月19日、深堀の武士深堀三右衛門と志波原武右衛門が、唐蘭商売元締で高木彦右衛門の仲間惣内と大音寺坂で出会った折、三右衛門がつまづき、はねた泥がかかったことが喧嘩の発端で事件に発展しました。その夜、彦右衛門の召使は仲間とともに五島町の深堀屋敷に押しかけ、暴れて引き揚げ、翌日、深堀勢は21人で高木邸に打ち入り、彦右衛門らを斬殺しました。この時、三右衛門は高木邸で、武右衛門は浜町大橋の上で、それぞれ切腹しました。翌元禄14年(1701)3月21日、長崎奉行は残った深堀側19人に対し、10人に切腹、9人に五島各地への流罪の判決を下しました。この事件は、長崎喧嘩騒動としても伝えられています。

深堀鍋島家墓地(市指定史跡)

江戸時代に佐賀藩の家老職を勤めた深堀鍋島家歴代の墓所で、全部で41基あります。

18代深堀純賢の時に佐賀藩の支配下に入り、深

深堀姓を鍋島姓に改めました。墓地は奥行き17.5m、間口14.5m、外壁は石彫、正面入口には石造半円の門があります。正面奥に18代純賢の供養塔があり、左右に19代茂賢から28代茂勲までの当主と正室、後室などの墓碑があり、正面中央には29代茂精以後の合葬塔があり、墓地入口左右には家臣、殉死者などの墓碑が並んでいます。長崎市における唯一の旧藩主クラスの墓地として貴重です。昭和49年3月に市指定史跡に指定されました。

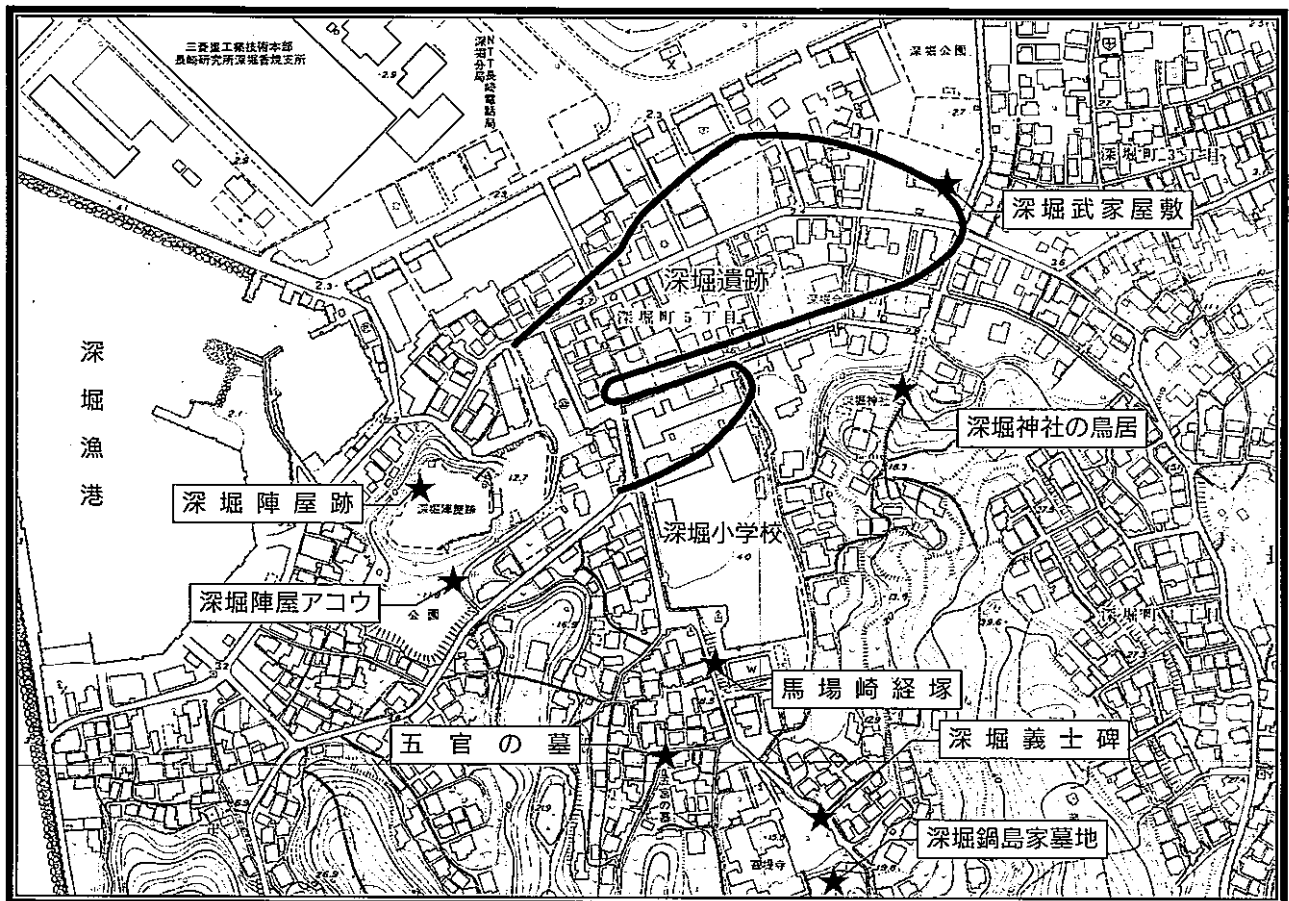


深堀鍋島家墓地(市指定史跡)

深堀遺跡(埋蔵文化財)

深堀遺跡は深堀町5丁目を中心にした旧浜堤上に位置する遺跡です。昭和39年から41年にかけて、長崎大学と別府大学により発掘調査が行われ、その後も昭和55年、59年～62年、平成12年度から15年度にかけて長崎市事業の一環である深堀町下水道工事に伴う発掘調査を含め、十数回に渡る調査が実施されています。平成15年度の調査で大まかではありますが、深堀遺跡の範囲が確認されています。これらの調査により、原始、古代、中世、近世における遺構や遺物が多く検出されました。

深堀遺跡は縄文時代から今日に至るまで人々の生活が途切れることなく営まれており、長崎市内でもこのような遺跡は珍しく、貴重な遺跡の一つです。



深堀遺跡の範囲